

日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

日本ボストン会の皆様 ようこそ札幌へ

北海道・マサチューセッツ協会会長 森本 正夫

この度の東京からの日本ボストン会ご一行20名の皆様のご来札を、私ども北海道・マサチューセッツ協会一同、心より歓迎申し上げたところです。

茂木賢三郎会長はご体調がよろしくないとのことでお見え戴けませんでしたが、その後いかがでございましょうか。いずれ札幌にお越しの節は、是非お目にかかりたいと存じております。

明治政府は北海道近代化を進めるために、明治2年に開拓使を設置しました。そのリーダーシップをとったのが黒田清隆とホーレス・ケブロンを中心とした米国マサチューセッツ州から招かれた指導者達でした。北海道・マサチューセッツ協会の原点はここにあります。今日、北海道とマサチューセッツ州が姉妹州として交流を始めて12年になります。

昨年来の「北海道歴史の旅」の企画が、この夏に実現しまして、皆様には、なぜ北海道とマサチューセッツ州がという当協会の存在理由をご理解戴けた

ことと存じます。皆様に直接お目にかかり、親睦交流を深めることができましたことを、ほんとうにうれしく思っております。

開拓使の「北海道近代化とマサチューセッツ」を軸に、Dr. クラーク関連、札幌オリンピック施設などをご覧いただき、さらに「サッポロビール」をたっぷり飲んで戴けた訳で、皆様「サッポロ・エキスパート」になって、お帰りいただけたのではないかと思います。

今回、「ボストン」「マサチューセッツ」の歴史と現在の共通の話に花が咲きまして、素晴らしい交流会になったことと確信いたしております。その後数名の方が当協会にご入会いただきまして、まことにありがとうございました。

今後とも、相互の交流がますます盛んになりますよう、ご厚誼の程どうぞよろしく願い申し上げます。

10周年記念懇親会のお知らせ (同封ちらし参照)

日時： 平成14年11月15日(金) 午後6時開場、午後6時半開会。

場所： NEC三田ハウス芝クラブ(JR田町駅、都営地下鉄三田駅下車)

港区芝5-21-7、☎03-5443-1400

出席者： 当日払い お一人 6000円/同伴者 5000円

事前送金 お一人 5000円/同伴者 5000円

送金方法： 銀行送金

申込み先： 日本ボストン会事務局 (同封葉書、又はE-mailにて10月31日までにお知らせ下さい)

高尾山ハイキングのお知らせ (同封ちらし参照)

日時： 2002年11月23日(土) 午前9時、京王線高尾山口駅前 改札口前広場集合

日本ボストン会のホームページができました。http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~boston/

さくら

水野 賀弥乃

今年の桜はあっという間に列島を駆けあがった。平成14年3月31日(日曜日)、急遽1週間繰り上げられた日本ボストン会恒例のお花見大会であった。

正直に申せば、お花には余り期待せず、久しぶりに会員の皆様にお目に掛かれることだけを楽しみに千鳥が淵へ出掛けたのである。しかし、それは全くの嬉しい期待外れであった。ほとんどの花が終わってしまった桜の底力と言えるだろうか、思いがけずにその素晴らしさに出逢うことができたからだ。

少々寂しげな桜の大木を眺めながら、いつものようにそぞろ歩きをしている私達は、千鳥が淵をぐるりと巡り、さてそろそろ宴の席へと心が向きかけたその時、ふと、光に照らし出された老木に足を止めて仰ぎ見た。瞬間、私達は時を忘れた。

薄墨の空に淡き紅色の寂しげな花枝を茂らせた樹々が、一斉に花の舞いを見せてくれたのである。私達はしばしそこに立ち尽くし、なんと優雅な自然の恵みを、私達の髪に、肩に、全身に浴び戴いたことか。それは、この世のものとは思われない、まさに幻想的な時空だった。

最後の最後までそこはかたなく、清楚な華やぎに満ち溢れた桜花は、この世の空間を豊かに舞いながら、別れを告げて地に還ってゆく。かそけき花のひとひら毎に桜の精の宿るが如く、その花の舞い逝く中で、私達は自然の恵みを、温かさを戴いたのである。

そして次々に芽吹く若葉の新鮮さと相まって、桜の精気は我々に新たなエネルギーを惜しみなく与えてくれた。寂しげに花の残る樹々に、こんなにも私達を魅惑し、圧倒する力があるとは、全く思いも寄らないことであった。

思えば桜の老樹は、人々の愛情をその花にだけ手向けさせ、自らは黙ってひっそりと何百年も生きている。大地にしっかりと根づき、地球の栄養をたっぷり含んだ樹木はそのどっしりとした力強さを無言で、しかもこんな風雅な優しい態で私達に分け与えてくれている。こんなにも美しく生きることのできる桜の樹に畏敬の念すら抱く。

その昔、桜の精が舞台に舞う様子「西行桜」を*↑

初めての優勝

伊藤 敦子

ゴルフを始めて20年位になります。コンペにも数えきれない程参加して参りましたが、遂に初優勝の大感激を経験させて頂きました。

今年は4月までに3回しかコースには行けなくて、成績のことは全く念頭にはなく、皆様と久しぶりにお会いし、ゴルフを楽しむつもりで参加させて頂きました。こんな素晴らしい結果が出せて本当にうれしく思っております。

勝因は何だったのでしょうか、①パートナー(吉田様、山崎様ご夫妻)に恵まれ、ボストンの時と同じ様にリラックスしてプレーが出来たこと、②泉CCのコースが自分に合って、気持ち良くプレー出来たこと、③大枚をはたいて10年ぶりにアイアンを新しくしたこと等々ですが真の勝因は何といっても主人と別の組でプレー出来たことではないでしょうか。

秋の大会で、又皆様とお目にかかれるのを楽しみに、それまで少し練習を重ねておこうと思っております。本当にありがとうございました。

*編み出した禅竹氏信(ぜんちくうじのぶ)(一説によれば世阿弥の作)も、今宵の私達と同じように、桜の樹の精に包まれた経験をしたのであろうか。

日本人は永劫の彼方よりこの桜の精と出遇い続けて、その無言の力強さと一瞬の華やぎに魅せられ続けているのだらう。「さくら」の花、花卉を恵みのように与える老樹から、私達日本人はどんなに限りない力を与えられてきたことだらうか。

花の余韻はいつまでも私達を包み、宴の席へと誘ってくれた。藤盛様ご夫妻のお心尽くしの宴では、桜を愛でる日本人の歴史を改めて知る機会に恵まれた。今年は新たに太田様ご夫妻と国友様ご夫妻をお迎えして和やかに語らいの時が流れていった。

ふと気付くと、窓の外はしとどの雨。あたかも今年の桜が別れを告げるが如く窓を濡らしていた。

来年の春、また千鳥が淵でお会い致しましょう。来年は桜の精の宿る花卉を酒杯に浮かべて頂きましょう。少しでも、貴樹(あなた)の静かな力強さを頂けるように。この素晴らしい時を共に過ごさせて頂いた日本ボストン会の皆様に、再会を祈念しつつ、心からの感謝を申し上げたい。

名古屋ボストン美術館の見やすさ(続)

名古屋ボストン美術館長 浅野 徹

この会報の17号に、米国のボストン美術館よりも名古屋ボストン美術館の方が見やすかった、といわれたあるご婦人の感想を紹介して、こうした感想の生じた理由のひとつとして、美術館の規模の違いを挙げた。

すなわち、ボストン美術館などの名にし負う欧米の大美術館の壮大な規模と展示品の圧倒的な量を前にしたとき、見る側の方に自分の見たいものをはっきりさせておくなり、あるいは数日を費やしてもよいといった時間的余裕を持たない限り、漠然とした印象と疲労感だけを持ち帰ることになりかねない、というようなどころまで書いて、一年以上が経ってしまった。実に不様なことだがまとまりをつけねばなるまい。

確かに名古屋ボストン美術館は誠にこじんまりした施設である。全展示作品を時間をかけてゆっくり見たとしても、せいぜい一時間半から二時間位のところで、肉体的な疲労を覚えるほどでもあるまい。だが、見やすいというのは、単にこれだけではないはずである。

美術館の4階の展示室は年2回開催の企画展会場に当てられていて、米国ボストン美術館の9部門のうち主に一部門から明確なテーマ設定にしたがって作品が選びぬかれて展示されている。5回の常設展(正確に言えば5年間の長期展覧会)も古代エジプトとギリシャ・ローマの美術を紹介することに限定されている。

このように作品が一定のテーマにもとづいて選ばれていることと、作品のよさや意味を出来る限り引き出すべく学芸員が努めている展示方法(会場構成、照明、解説パネル)とが、観客の集中力を最後まで持続させ、展覧会の内容を明瞭にとらえるのに役立つ。こうしたことが、見やすかったという感想を引き出すのに大いにかかわっていると私は考えている。

さて、この機会をかりて、今年の秋から来年の夏までの名古屋ボストン美術館の二つの展覧会を簡単に紹介しておきたい。

第8回企画展「アジアの心、仏教美術展」

今秋10月5日から来春2月16日にかけてが、第8回企画展「アジアの心、仏教美術展」である。

仏教が紀元前5世紀頃にインド中部に起こり、その後アジア一帯に広まり、わが国には飛鳥時代に伝わったこと、また仏教の興隆にともなって、礼拝や祈願のために寺院をはじめ、そこに安置する仏像や仏画、あるいは荘厳用の工芸品が各地で生み出されたことは、よく知られている。

この展覧会は、仏教美術の名品によって仏教伝播の跡をたどる一方、それらの美術の表現の仕方が教義の一定の規範にしたがいながらもアジア各地の文化的風土の影響を受けて、どのような変化をみせたかを一望しようとするものである。

出品作品50点。改めて驚かされるのは、このような包括的なテーマを実現できるボストン美術館の東洋美術コレクションの豊かさである。なかでも、かつて門外不出だったビゲロー・コレクションの逸品13点が含まれていることは注目すべきである。

第9回企画展「印象派とボストン展」

この第9回企画展「印象派とボストン展」は2003年4月26日から8月31日まで。印象派の絵画は、当のフランスより早くアメリカで、それも特にボストンの人々に評価されて収集され、その多くがボストン美術館に寄贈されたことによって同館の印象派コレクションは世界的に有名になった。

この展覧会は、モネ、ドガ、ルノワールなどフランス印象派の作品を中心として、その影響を受けたボストン出身のアメリカ人画家サージェントなどを加えた絵画50点によって構成される。

名古屋ボストン美術館の開館記念展として開かれた第1回企画展「モネ、ルノワールと印象派の風景」展とは違った観点で、フランス印象派とその広がりを楽しめるはずだ。

問合先 名古屋ボストン美術館

名古屋市中区金山町1-1-1

☎052-684-0101(代表)

休館日 月曜日(祝日、振替休日はその翌日)、
年末年始(12月24日~1月1日)

旅行記・北海道ツアー

篠崎 史朗

北海道の歴史といえばクラーク博士に札幌の時計台、と平均的な日本人は考える。彼が札幌を去る際に残した“Boys be ambitious”の言葉は、時代を超えて、余りにも有名である。確かに、明治維新この方、これ程日本人の魂を揺さぶり、鼓舞し続けた言辞は他に見当たらないといってよい。

しかし歴史年表によれば、彼の北海道滞在は1876年(明治9年)7月から翌年4月中旬迄の約8ヶ月という短い期間であり、かの有名な言葉も、別れに際し札幌農学校の学生にいい残した一言でしかないともいえるのだが、何故彼の名がかくまで日本人の心に刻み込まれることになったのか。

日本と米国ニューイングランドの交流史に関心を抱く当会の歴史同好会としては、この点を些か学習してみたいと以前から思い続けてきた。今般北海道・マサチューセッツ協会(以下HOMASと表示する)の全面的なご協力を得て、札幌訪問旅行として実現することが出来た。又滞在中、HOMAS会員の方々との交歓も行い、旅行をより意義深いものにすることが出来た。先ずは、旅行準備・受入れにご尽力頂いた関係諸氏に厚く御礼を申し上げたい。

(1)

7月の北海道は、うっとうしい梅雨の本州とは異なりさわやかで、例年最適な旅行シーズンなのが、今年は気候のサイクルが異常なのか、早々に台風の余波を心配する羽目となった。しかし、7月13日は青空が覗き、14日も小雨こそばらついたものの支障なく、両日に互り恙なく旅程を消化出来たのは幸いであった。

13日(土曜日)の午前11時、参加者20名が新千歳空港到着ロビーに集合し、全旅行中お世話頂くHOMAS中垣正史事務局長の先導で、チャーターバスに乗って行動開始。行く先は早速クラーク博士ゆかりの「旧島松駅通所」(現北広島市島松)。

駅通とは人馬の往来に便宜を供するための宿駅のことで、古くから道内各所に存在したが、島松駅通は明治に入って開通した函館・札幌間馬車道の駅通として設けられたものである。現代の高速自動車道のサービスエリアと思えばよい。

1877年(明治10年)4月16日、帰国するクラーク博士が、札幌から同行してきた札幌農学校の生徒に向かい、“青年よ大志を抱け”の一言を發して馬上の人となったのはまさにこの駅通所であった。現在敷地のなかにその記念碑が立っている。

現存する建物は管理者だった中山久蔵の個人の住居でもあったようだ。中山は、気候厳しいこの地で稲作技術を開発し、石狩水田の祖と言われる人物である。彼の努力と工夫の跡が建物脇横手に残る水田跡に残っている。北海道のような寒冷地でも米が作れるようになったのは彼の功績に負っている。

このような「旧島松駅通所」は道内でも屈指の重要史跡の筈であるが、その割には知名度が低いのか、シーズンにもかかわらず、この日見学者の姿は少なかつた。気のせいなのか、クラーク博士の記念碑も片隅でぼつねんと淋しそうに見えた。一行のバスはこの後札幌市へ。

昼食後に訪れた「羊ヶ丘展望台」は、島松に較べてぐっと現代的で、さすが札幌を代表する観光スポットである。丘の上から市の町並みや、先頃サッカーW杯の会場にもなった札幌ドームを望む景観が素晴らしい。1959年(昭和34年)、国の農業試験場の一角を観光用展望台に転用し、その後幾つかの施設が追加され、現在に至っている。

ここのクラーク博士の立像は堂々として立派である。北大創立百年・米国建国2百年を記念して1976年(昭和51年)建立されたが、この年は博士生誕150年にも当たっている。偶然とはいえ、面白い周年の一致で、彼の功績を顕彰する最適のタイミングだったのだろう。石狩平野に向いて右手を挙げ、指さす先は何なのか、この世の理想か、人のあるべき姿か。その詮索はさて置き、この像と、黄芥子畑の向こうに午後の陽光を浴びて光るドームを眺めた時は、あたかも北海道の過去と現在を一枚のレンズを通して見る気分になった。

人目を引いたのが「さっぽろ雪祭り資料館」の松原館長。山高帽子にフロックコートという出で立ちで、観光客相手に紙芝居を演ずる。演目の中心はやっぱりクラーク博士のようであるが、クイズを交え、子供にもわかるような語り口はききと受けるだろう。館長になる以前から永年、週一回の定休日を除き、天候の許す限り一日二回演ずるとのことだが、珍しい館長さんがいるものである。

旅行記・北海道ツアー(つづき)

(2)

北海道開拓の歴史におけるクラーク博士の地位について触れてみたい。

明治政府が国の富強を目指して設置した北海道開拓使は、黒田清隆を長官として、1872年(明治5年)に開拓十年計画に着手し、屯田兵制度を設け、移民を奨励して農業開拓を進めることとなった。短期に効果を挙げるため、開拓方法は経験豊かな外国人を招聘して指導を仰ぐこととした。その場合、黒田らが想定した手本が米国であった。米国のフロンティア開拓の進展と、東部の気候風土が北海道に類似していることがその理由とされている。

招聘された外国人の第1号は当時の米国農務省長官H. ケプロンで、開拓指導責任者兼顧問としてであった。大国の現役長官がいきなり極東日本の北辺の島の開拓にというのは、常識では考え難い人事だが、米国政府は太平洋への進出を、将来の国家的課題として、その頃、既に意識していたのだろうか。

開拓はこのケプロンの構想のもと進められたが、それは単に農牧分野に止まらず、広く北海道のインフラストラクチャーの総合開発・整備を目指すものであったといえる。しかしその中でも、近代日本の形成に大きな影響を与える成果を生み出すこととなったのが、人材教育、即ち学校教育であった。

明治政府も教育を重視し、十年計画の当初から『開拓使仮学校』を東京に設置し、ケプロンの進言に従い外国人教師を投入していた。これが1776年(明治9年)に舞台を札幌に移し、来日したW. S. クラーク博士を教頭として、札幌農学校となり、やがて多くの逸材を日本社会に送り出す学舎となるのである。クラーク博士50歳の時、マサチューセッツ農科大学々長のまま休暇を取っての仕事であった。

この学校の素晴らしさはその進歩的なカリキュラムにあったといえる。それは全人格的教育を目的として、知育と並び徳育・体育を重視するものであった。具体的には農業専門科目だけでなく、英語の比重が大きく、人文・社会科学系科目も多かった。又、それ迄日本の教育に欠けていた弁論と討論を通しての学習が奨励された。徳育のため聖書を教材とし、体育目的で兵学が採用されていた。図書館までが学内に設置されていた。

こうした現代日本の教育にでも通用しそうな内容の学校が、明治の早い時期に存在したのは驚くべきことである。当時の為政者の先見性と教育にかけた

クラーク博士の情熱が生み出したものであろう。カリキュラムや校則は彼自身がマサチューセッツ農科大学をモデルに作成したものだが、これらは彼の帰国後、教え子で彼に伴って来日した教師や卒業生を通し定着し、校風・伝統となっていった。

その中で、内村鑑三・新戸部稲造・宮部金吾他後世に名を残す多数の人材が育ち、彼らが又次の世代への人材を育成した。成果を次世代に残し、伝える、それが教育の大切な効果である。

今日まで多くの日本人がクラーク博士の名を忘れないのは、そのような効果の一つの原点に彼の存在を見るからであろう。

尚、記録によると、主導的役割を果たした外国人指導者の多くが米国マサチューセッツ州出身者である。クラーク博士は勿論、ケプロンや彼に伴って来日したB. S. ライマン、又、クラーク博士の帰国後に札幌農学校で人材育成に貢献したW. ホイラー他、歴任教頭は皆同州出身者であった。現在、北海道がマサチューセッツ州と提携・姉妹関係にあるのも、それを見ると、至極当然といえる。

(3)

北方四島の帰属がどちらであれ、北海道の隣はロシアである。この国が何故北海道の開拓に関わることがなかったのか。

カムチャッカ半島から千島列島を南に数えて22番目の島が北海道である。地政学的に考えると関わりがあって不思議ではないところである。しかし、日ロ両国間の歴史はその様には展開しなかった。紙面の都合上、今回はこの経緯は差し控えたい。

結論的にいえば、日本は江戸期からこの北方の隣人に恐怖に近い不安感を抱き、それが維新政府にも引き継がれた。北海道の開拓は国家富強のためではあったが、それは同時にロシアに対する北端の防衛強化を意味していた。

(4)

初日の旅程の締めくくりは、HOMAS 会員との交歓会である。場所は市内の「サッポロビール園」特別室で、隣接する「ビール博物館」見学後、夕食を兼ねて行われた。森本正夫会長はじめ十名の会員の方々のご出席を頂き感謝に堪えない。

交歓会は森本会長とそれに続く当会の藤盛紀明副代表幹事の挨拶のあと、出来立てのサッポロ・クラシック・ビールで乾杯して始まり、ジンギスカン焼

旅行記・北海道ツアー(つづき)

・タラバ蟹・チャンチャン焼風サケなどを楽しみながら歓談に入ったが、程なくして席は今堀忠国ビール博物館々長の予期せぬ隠し芸の歓迎に圧倒されることになった。

未知の面白い人物に出会うのは旅の一つの楽しみである。昼間訪れた羊ヶ丘展望台の松原館長も楽しかったが、この今堀館長さんは極め付きに愉快である。アジアで唯一のビール博物館々長とのことだが、一方ではHOMASの理事を務めておられる。

特技が楽器、今年が芸能生活40周年と自称されるだけあって、その芸達者ぶりはプロそのもの。ギターやトランペットを自在に操り、レパトリーも矢鱈に広い。国際交流のため、外国人観光客には彼らの国歌を演奏するとのこと、その一端も披露。何よりも感心させられたのは、次から次へと繰り出すテンポと、間断なく出て来るギャグで会場を笑わせる力である。つい時間の経つのを忘れることになる。

(5)

二日目の予定は、午前中市内の歴史的文化的財巡り、冬季オリンピックの会場となった大倉山ジャンプ台での昼食、午後は「北海道開拓村記念館」と「開拓村」を見学し、新千歳空港へというものであった。

午前中、市内で見学した時計台や旧道本庁舎などは、札幌を訪れる機会のある者には見馴れた存在かも知れないが、このような文化財は時折観察し直し、展示資料を再閲覧することが大切である。それ迄の知識野不足を補い、誤った知識を正す機会になるかも知れないからである。

残念ながら時間の関係で「豊平館」を見る機会がなかったが、市内の歴史的建造物を見ると、開拓時代の米国の影響は、単に技術や制度だけでなく、その頃の北海道の文化全般に及んだことが理解出来る。

現在でもその威容を保つ赤煉瓦の旧道本庁舎には、完成の当時、多くの日本人が圧倒され、米国という窓を通して西洋文明の力を印象づけられたに違いない。

今や札幌市の象徴的存在となった時計台は、てっきり最初から時計台そのものと、多分、多くの日本人が理解しているのではないか。しかし、それは事実とやや異なる。札幌農学校が体育目的に兵学を採用したことを前述したが、この建物は主としてその訓練の場とするために建築された多目的ホールであった。演舞場といわれる所以である。その一部であ

った鐘楼に数年後に米国から振り子時計を輸入し、現在見られるような姿になったものである。

入口で頂戴するパンフレットには短い英文解説があり、そこでは当時のクラーク博士を“President of Massachusetts Agricultural College”と記されている。昨年春頃迄は、誤って“President of the Massachusetts State University of Agriculture”となっていた。この誤りを指摘したのは、今回の旅行に参加された当会の三好彰さん。誤りはHOMASを通して時計台に伝えられ訂正されたものである。

関秀志さん。第1日目からお付き合い頂いた。HOMASの理事で、ライマンコレクション保存協会委員会常任委員も務められる北海道の歴史の専門家である。午後訪れる「北海道開拓記念館」に永年勤務し、「北海道開拓村」の建設に責任者として携わった経歴の持ち主である。市の資料館を訪れた際、屯田兵の入植など当時の様子について伺ったが、生き字引のようにお答え頂いた。この旅行で巡り会った忘れがたいお一人である。今回尋ね忘れたが、市内の歴史的建造物に「赤い星」が見られるので、一度機会を得てその由来を伺いたいと考えている。因みにサッポロビール昭和初期のラベルにも「赤い星」が見られる。

大倉山ジャンプ台の競技場とウインター・スポーツ・ミュージアムをゆっくり見物し、昼食を取った後、旅程最後の「開拓記念館」と「開拓村」へと向う。この両施設は北海道の歴史や自然、開拓時代の人々の生活に関する多くの展示物があり、北海道を巾広く勉強する最適の場所である。

今回はアイヌを取り上げる迄には行かなかつたが、次の機会に譲りたいと思っている。

以下は余談である。明治30年代に洞爺湖の虻田村(現虻田町)でアイヌ人教育に献身された小矢部全一郎氏がおられる。この方は、若い頃、北海道に渡り、その折にアイヌの境遇に心を傷めた。その後、勉学のために渡米された。宿願が叶い、米国から戻った後、夫婦でアイヌの救済を試みられた。その動機、1899年(明治32年)帰国直前にボストンで出版された半生記“A Japanese Robinson Crusoe”に記されている。遺品の本は子孫の手元に残され、百年近く経た1991年に孫娘夫妻の努力で日本語に翻訳され、出版された。この孫娘は全一郎氏が生涯を終えた東京・品川区大井町の家で育ち、筆者とは共に遊び、学んだ幼な馴染みである。

(2002年8月記)

美術愛好会

旅先で出会った

James Macnail Whistler(1834-1903)の作品

酒井 典子

今年5月7日、Orsay 美術館(パリ)を訪れた日は、メーデーの直後でもあり、警官の姿が至る所にみられた。

一階のMuseum shops辺りは改装中。世界中からのビジターもことの他多く、ゆっくりと観賞して回る雰囲気ではなかった。

二階の印象派グループの中であって、その絵の前は何人かの人が動こうともせず見入っていた。

私の是非会いたかったJames Macnail Whistler(1872)作、“Arrangement in Gray and Black No.1”: The Artist's Mother が人だかりの間に見え隠れしていた。この肖像画は、アメリカ生まれ、パリ、ロンドンで活躍したWhistlerの最大の傑作と言われる。

白い小花模様の黒いカーテンと壁にかけてある版画がバランスよく描かれている。白い帽子、白いレースのカフス、そしてレースのハンカチの上に置かれた婦人の小さな手が人物に気品を与えている。

静かに一点を一心に見つめる画家の母の顔を、Whistlerは清教徒である母の内面を描き出そうとしたのだろう。と共に画家自身の歴史を語ろうとしているのだろう。Whistlerの芸術に占める家族愛の重要性をもっとも示している作品である。

7月30日、モンリオールからボストンへと向かった。着いた日の蒸し暑さ、日本と変わらない暑さに驚いた。翌日、Boston美術館を訪れた。

Whistlerの作“The Little Rose of Lyme Regis”(1895)に出逢う。1895年9月、英国南部のドーセット州のライムリジスへ妻の転地療養のため訪れた。街で偶然逢った同市の市長の娘ロージイを描いた。

一心に見つめる大きな瞳と固く結ばれた唇、膝の上で組まれた小さな手。どこか幼さの残る長女は不安そうにさえ見える。

季節をを異にして訪れたパリとボストンで出逢ったWhistlerの二つの絵は、旅の思い出で一層色濃いものにしてくれた。(8/31/2002記)



James Macnail Whistler

“Arrangement in Gray and Black No.1”:

The Artist's Mother(1872)

歌う会へのお誘い

酒巻 則子

歌が好きな方、私たちといっしょに楽しく歌いませんか。月に1~2回のペースで集まり、発声を学びながら、二部、三部の混声合唱を歌っています。レパートリーは日本の歌と英語の歌です。今までに3回ほど練習しましたが、とてもなごやかな雰囲気、皆、毎回の集まりを楽しみにしています。

経験のある方にもない方にも、個人の特性を生かした指導と音楽作りを目指しています。練習日は第1、第3水曜日の午後を予定しています。

ご興味のある方は、下記までご連絡下さい。

酒巻:

指導者プロフィール

酒巻則子: ニューイングランド音楽院大学院声楽科および指揮科卒。ノースイースタン大学声楽講師、エピスコパル教会の合唱指揮者を務める。コーラスボストン創始者。本年5月24日、コーラスボストン5周年を記念し、ブルックライン市のセントポール教会にてフォーレの「レクイエム」を指揮した。

日本ボストン会との うれしいご縁

北海道・マサチューセッツ協会
理事・事務局長 中垣 正史

私は、山下健一前事務局長のあとを受けまして、毎年の日本ボストン会総会に「歓迎」していただきそれをご縁にいろいろな方々との交流・交信をさせていただいて参りました。

「歴史を飲む会」の篠崎史朗様から、北海道歴史の旅のお考えについてお話がありましたのは2000年の夏ごろだったかと思います。そして11月総会の折に、改めてお話があり、翌年の秋に予定されましたが、機熟さずして、やっと今夏の実施となりました。

皆様方には台風の間をぬって、札幌にお越しいただきまして、初日は好天に恵まれ、2日目の午後は雨に会いましたが、ご無事にご帰京されたと伺いほっとしたところです。

当協会は今年度、国際交流事業の一環としての日米高校生のプラスバンドのジョイントコンサートを計画しております。北海道からは明年1月6～14日、札幌白石高校の訪問団(約90名)をボストンに派遣し、ボストンシンホニーホールでの合同コンサートや各地の交流行事に参加します。

マサチューセッツ州からは明年4月16～23日、コンコードカーライル高校の訪問団(約90名)が来道し、札幌コンサートホールKitaraに於ける合同コンサートや各地の交流行事への参加が予定されています。目下は、この交流行事の準備に追われています。

この度の幹事役としての篠崎様のご苦労は大変だったと思います。ご縁がありまして、私は、皆様ご来札の2日間、ガイド役を務めさせていただきました。

今回のご来札をご縁に、ますます北海道・マサチューセッツ協会と皆様との交流が深まることをうれしく思っております。

幹事会記録

2002年6月10日(月)出席者(18名)

*北海道ツアー計画(7月13～14日)報告。

2002年9月30日(月)出席者(14名)

*総会準備討議。

*次回会報発行、原稿締切1月末、3月中旬発行。

次回幹事会2003年1月17日(金)

ボストン・ポップスが やってきた!

関 直彦

4本のフレンチホルンが解説付で、重厚に、あるいは軽妙に織りなす、バロックから現代に至るまでのバラエティに富んだ数々の音楽。締めくくりは、お馴染みにトレッチ・トラッチ・ポルカ。

あのボストン・ポップス・エスプラナード・オーケストラの4人のホルン奏者(*)が7月17日、日本ボストン会のためにユニークなミニ・コンサートを催してくれたのです。場所はNEC芝倶楽部の手頃な大きさの大ホール。大成功でした。

ボストン・ポップスはほとんど毎年、7月にシーズンが終わると日本公演にやってきます。公演のない日は遊んでいるよりも、日本人との交流を深めたいとの意向で、有志による奉仕のコンサートが実現したものです。日本ボストン会なら英語が通じるので、正にうってつけ。

当日は米国大使によるレセプションが急速入ったものの、大使の挨拶を聴いただけで駆けつけてくれました。準備に要した時間と努力を考えると、頭の下がる思いです。それに、約束したことに対する責任感の強さに感心させられました。(正直なところ最後まで多少の不安がありました。)

メンバー全員が、コンサート後の交歓会を大変楽しんでくれました。ミューチュアル・ベネフィットの実現です。

毎年来日するとは限らないけれど、来た時には当会のために、毎年でもミニ・コンサートを提供してくれると、交換パーティの会場で約束してくれました。帰国後、ホルン部門のリーダーであるケビン・オーウエンから連絡があり、次回は弦と管で10人くらいのメンバーを揃え、チェンバー・アンサンブルをやろうという申し出でもあります。

楽しみですね。日本ボストン会活動の目玉の一つとなるでしょう。乞ご期待。

*注) Mr. Kevin Owen,

Mr. Richard Menaul,

Ms. Nona Gainsforth,

Mr. Thomas Haunton